

ディケンズ批評 発展の時代

Steven Marcus の Dickens 批評

－ 書かれざるテキストを求めて －

The Literary Criticism on the Works of Dickens by Steven Marcus:
In Pursuit of an Unwritten Text

植木 研介

Kensuke UEKI

序

先ず始めに2つのことを明示しておかなければならない。

スティーヴン・マーカス(Steven Marcus)は批評家として *Dickens: From Pickwick to Dombey* (Chatto & Windus)を1965年に刊行し、研究者として、ディケンズ作品の批評界に登場した。この本ではディケンズの作品を年代順にたどり、作家の小説家としての成長を究明することが目的とされている。そしてこの本の「序文」で、彼が述べているように、全てのディケンズの作品を対象とする本を目指したが、ディケンズの個々の作品は凝縮された複雑なもので、それぞれを纏め上げている原理を突き止め精査するにはかなりの批評分析が必要となる。そこで1冊の本として収めえない分量となると分かったために、改めて別の著書においてディケンズが *Dombey and Son* (1848)以降に書いた *David Copperfield* (1850)以後の作品を論ずることを企図していると書いている。従ってこの序文は“*This volume is planned to be the first of two*” (11)と、この著作は2冊本の第1巻にあたりと言いきっている。ところが、この続編が35年以上過ぎた現在も出版されていないことが第一に指摘されなければならない。

第2の点は、私がこの論考の副題に用いた「テキスト」の意味である。「テキスト」は現在の批評理論の中できわめて多角的に用いられており、まずこの点を定義することから始めていかなければなるまい。私がここで言う「テキスト」とは、文字で書かれている文章のことであって、「書かれざるテキスト」とは狭義にはマーカスが書いていない幻の書物のことであり、広義には昔から日本語で

「行間を読む」という形での、書かれてはいないが、事実上読者から見て書かれているに等しい文章をも含んでいる。書かれていると判断するか否かは読者に委ねられることになる。特に後者の意味での「テキスト」は、マーカスの著作を読む際には必ず考慮することが求められている。ある意味では厳しい要求だと思われるが、この判断自体が読者の力量をためす試金石となっている。

「ディケンズ批評」という枠組みでは、マーカスの続編が出版されていない現在では、ディケンズの全作品に対する、マーカスの業績は要約し得ないのであって評価しがたい。だが、ディケンズ没後100年にあつた1970年には、ディケンズの文学的評価は回復され揺るぎないものになって現在に至っている。批評史の動向の中において *From Pickwick to Dombey* の果たした役割を顧みるなら、ともすればディケンズの後期作品に研究者の耳目が向けられる中であつて、前期の作品を一つ一つ実証的にかつ作品論として作家ディケンズの成長を精緻にあとづけた点は高く評価してよい。マーカスが続編を書いてないことは事実である。しかし、そこに留まるのではなく、マーカスの文学研究全体を振り返る作業から出発して、どうしてこのような事態、即ち、後半を扱うはずの *From David to Our Mutual Friend* が今に至るまで幻のままなのかをこの論考では問いつづけてみることにする。

1. 彼は何をしているのか - 年代順マーカスの仕事

1928年に生まれたマーカスの姿を求めて、インターネットのアドレス http://www.columbia.edu/cu/record/archives/vol22/vol22_iss19/record2219.16.html を見ると、“Columbia University in the city of New York Record” Vol.22, No.19が掲載されており1997年4月4日の次のような記事に出会う：

Marcus, George Delacorte Professor in the Humanities, will receive the 36th annual Mark Van Doren Teaching Award, for “humanity, devotion to truth and inspiring leadership.”

Citing students who praise Marcus for his unparalleled wealth of knowledge on 19th century literature, and for changing the way that they read, write, and think about literature, the committee salutes Marcus’ “lifelong commitment to the College, a place where he has worn many hats, including student, administrator and teacher.”

「学生の読み方、書き方、考え方を変えた」とあるところからも分かるように、彼の読み方が教育の中で多大な効果を与えているのだ。文学批評理論の構築と実践において端倪すべからざる能力を見せるミラー(J. Hillis Miller)と同じく、彼の読み方、批評の方法も変わり、それが学生を変えつづけているのであろう。彼は、常にまず歴史のコンテクストの中で実証的に対象とする作品や文書を考え

る。文学批評の手段である文章の分析方法を、文学を中心に置きながら、その他の文書にも適応しているのだ。引用文中の‘literature’は単純に文学だけの意味ではないようだ。「人文科学」の教授の職にあるのも頷ける。

1965年のディケンズに関する著作から、幻の続編までの謎の解明にあたって、マーカスの用いる手段を用いてみたい。即ち、手がかりを求めて彼の主な仕事を年代順に番号を付して列挙してみると次のようになる：

1. *The Life and Work of Sigmund Freud*, tr. by Earnest Jones, edited and abridged by Lionel Trilling & Steven Marcus. (Basic Books, 1961)
2. *Dickens: From Pickwick to Dombey* (Chatto & Windus, 1965)
3. *The Other Victorians: A Study of Sexuality and Pornography in Mid-nineteenth Century England* (Basic Books, 1966)
4. *Engels, Manchester, and the Working Class* (Random House, 1974)
5. *Representations: Essays on Literature and Society* (Random House, 1975)
6. *Art, Politics, and Will: Essays in Honor of Lionel Trilling*, edited by Quintin Anderson, Stephen Donadio, Steven Marcus (Basic Books, 1977)

列挙した著書名から分かるように文学作家の名前の記された著作は2のみで、彼の仕事は文学を核としながらその関心は人文科学、社会科学の多岐にわたっている。1と6からは文学批評家ライオネル・トリリングと研究の上で協力関係があり、心の暗号を解読する鍵ともいえるフロイト心理学の精神分析的解釈への造詣の深さが暗示される。また19世紀という時代に知悉し、フロイト以前の時代の表象に興味を持ち続けていることが知られよう。

時代的にはアメリカの1960年代から70年代にかけての、政治を巻き込んだ社会文化運動、それと連動するかのようによ興し、西欧思想世界に大きな影響を与えたアメリカでの批評理論の具体的な実践展開が忘れられてはならない。後者における西欧の「知」の組み換えとも言うべきその萌芽はフランスから発生したにしても、アメリカでの実践は目覚しかった。

こうした時代背景を考慮に入れて、マーカスの著作群から判る事を、整理しておくとして、常にフロイトの心理学を基盤として、論理の構築を行っているらしいことと、成長ないし変容していく批評理論のちょうど始まる時期に、アメリカで仕事をした批評家像が浮かんでくる。上掲のリストから私が重要と考える3つの著作をたどる形でマーカスを探ってみる。

II-1. ディケンズアンにとっての原風景 *Dickens: From Pickwick to Dombey*

マーカスはディケンズの作品を論じていく際まず作品の書かれた社会的背景、および作家の生涯をいつも考察の中に入れていく。この社会背景や時代を意識し

ている点では、ハウス (Humphry House) の *The Dickens World* (Oxford UP, 1941) や バット (John Butt) と ティロトソン (Kathleen Tillotson) の *Dickens at Work* (Methuen, 1957) と続く、実証的ディケンズ批評の系譜の中にあり、着実にその成果を取り入れている。ただし論理展開の節目にはフロイトの影響が見られるのであって、ここではエドモンド・ウィルソン (Edmund Wilson) 以来のフロイト理論による批評の系譜をたどることが出来る。そして、フォーマリズムと違った形で、作品の有機性、作品の意図を論じていく作品論の部分は一見古いタイプの感性だけにたよる批評家にみえるのだが、そこには、いわゆる「新批評」とは決別した批評家がいるのであり、私には、ヘーゲル以後の弁証法的思考に長けたマーカスと映る。バランスのとれた鋭い批評と言い換えてもよい。

The Pickwick Papers では「父と息子」のテーマが見られると、今日から見ればごく普通の見解を述べている。だが注意してみると次のように書いている。“The means Dickens employs, in *Pickwick Papers*, to achieve the idealization of the relation of father and son is not unfamiliar to us in the literature of a later age: he provides Sam with two fathers?” (33)。二人の父親を与える手法を「後の時代の文学からみる我々には珍しくはない」との文章は、マーカスの思考は常に「時代」の中で判断を下していることを示している。二人の父親とはもちろん実の父トニーとピックウィク氏である。トニーとサムと理想的関係をマーカスは2年以上会っていない二人の再会の場面でサムが父に向かって言う「デブ」(corpulence) (34) のコックニー訛りの呼びかけの中に見出している。マーカスはコックニー訛りとまでは説明していないが、それで無ければ二人の間の、むしろ実の父を守る息子という親子関係の面白さは説明できない。ここには単語のレベルで敏感に反応するマーカスがいる。むしろ何事においても頼りない父トニーを守るサム・ウェラーの関係にディケンズとディケンズの父親の関係を指摘するマーカスにはフロイトの理論が現れてくる。さらに畳み込んで心理学の用語で作品中のサムの立場を、“Sam is in fact the center of intelligence in the novel, and Dickens's surrogate” (34) と説明する。

ピックウィク氏とサムとの関係においても見事な分析の冴えを見せている。ピックウィク氏の理想と行動は矛盾しているように見えるがそのパラドックスを意識しているのがサムなのだ。それをマーカスは、“Sam Weller is that awareness, and without it, without his constant commentary, we would not be convinced of the validity of the celebration” (35) と表現している。‘the celebration’ とは、人間関係の簡潔さ、素直さ、無邪気さを作品がよしと認めて言祝ぐことである。

マーカスは第8章で *Dombey and Son* を ‘The Changing World’ の表題のもとで論じている。もちろん作品の中の変わり行く時代と、それと共に変わる時間の概念のせめぎ合いを作品の中に見ているが、言葉、文体の音調などから分析してこの

作品でのディケンズを高く評価している。“The voice that speaks in it is older and more tempered; it moves with greater deliberation, with a measured, ponderous directness, and its range seems purposefully restricted. Here for the first time in Dickens is a voice that seems to be listening to or overhearing itself; its tone reverberates inwardly, and though the prose is direct, it is not simple nor without subtlety” (293)と文体を分析する。

さらに作品の35章の笑いを呼ぶ比喩表現を引用しながらマーカスはこう記述する。“Again, when Miss Tox undertakes to befriend Rob the Grinder, she makes an effort to draw him out. ‘He drew out so bright, and clear, and shining, that Miss Tox was charmed with him. The more Miss Tox drew him out, the finer he came --- like wire’(ch. 38). If there is still an interest in the question of where and how the rhythms of the industrial revolution came to be a part of the living language, the answer, I think, will be found in the prose of the great Victorian novels”(294-5)と主張するのである。‘finer’に込められた比喩表現の面白さは当然のこととして彼は説明せず、それは作品自体に譲っておいて、‘wire’の一語に「産業革命」のもたらした言葉の変化、それがヴィクトリア朝の小説に現れてくると他の文学作品にまで普遍化している。こうした社会の意識即ち概念変化の表象を指摘する部分に彼の最大の特徴である幅の広さが現れているのだ。かれの作品論は現在からみれば古風に思えるが、ディケンズ批評の上で存在感のあるものになっている。

11-2. 同時期に進行していた批評活動

Dickens: From Pickwick to Dombey (1965)の仕事と平行して行われていたと推論できるのが*The Other Victorians* (1966)の仕事である。このことは、両者の出版年と、後者の、‘Preface’における、著作の成立過程の記述から判断してまず間違いない。「性」を共通項として彼のこの研究にフロイトの理論が関連していることは理解できる。文字に書かれたポルノグラフィーはヴィクトリア朝に勢いを増したもとのとして、即ちこの時代ゆえに栄えたものとの認識のもとに、「表」と「裏」の関係を意識しつつ、文学との対極性を強調しながらも、やはり「文書」として文体を分析している。語彙のレベルでは‘spending’などの語を手がかりに“a perfect, self-enclosed economic and productive system” (245)の像を、“the sphere of socioeconomic activity” (xv)から導きだし、その像がヴィクトリア朝の性意識の中に体系化され表象されていると、みごとな洞察をマーカスは提示する。

文学作品と対立する点としてポルノグラフィーは、決まり文句、クリシェイの「終わりの無い繰り返し」から成り立っていると指摘し、“anti-literature and anti-art” (195)であるといいながら、同時に次のように言っている。“Nevertheless, we

must also observe that in this one sense at least pornography is closer to certain existential realities than art or literature can usually be. For life itself does not end in the way that a work of literature does” (196)と述べて、‘realities’をどう表現するのか、文字表象をどうするのかにこだわり解析を試みるマーカスも「無限の反復」運動の内に人生の実存性を認めざるを得ないのであるし、そう指摘する。

ある事柄への時代が持つ概念にマーカスはいつも注目する。もう少し後にはフロイト心理学の言説の中で解かれる直前の、ヴィクトリア朝という時代が作り上げた矛盾だらけで現実から乖離した性概念の典型を、アクトン(William Acton)の言説に見だし、それに対抗する具体的な別の生の声を *My Secret Life* の中に読み取り、*My Secret Life* という本自体の存在を世に知らしめた功績は大きい。しかも歴史的に実証していくこの本の論述は手堅い論考の枠組みを持っている。

他方で、“almost all pornography is written by men and for men” (213)と主張してポルノグラフィーの目的はただ一つであるというマーカスの論は、私にはここからだけでも多くの議論がスタートすると思われる。批評の枠組みの妥当性に問題ないが、他の枠組みの可能性はないのかといった問題や、考察の細部にはそうだろうかと疑問を抱かせる論述も無いわけではない。だが、マーカスの意図がどうであろうと、ポルノグラフィーを正面から捉えて批評の対象とした仕事は画期的であって、異論はあっても高く評価されつづけるであろう。彼は言葉として声高に主張してはいないが、文学と共に、文学とはいわれなかった文字資料を読む新しい視点をポルノグラフィーを「読む」実践によって提示してくれているのである。

11-3. 時代の流れの中で

The Other Victorians が出版されて8年後にマーカスは *Engels, Manchester & the Working Class* (以下 *Engels* と表記) を出版した。この本で、彼はエンゲルス(Friedrich Engels)がドイツ語で1845年に脱稿した、*The Condition of the Working Class in England in 1844* を考察している。全体の主眼は、英国における産業革命の進行と共に人口の増加と都市化が複数の要因により発生するが、その典型的事例が、ネイピア(Sir Charles James Napier)が“the chimney of the world” (46)と表現したマンチェスターであり、その都市をエンゲルスがどう記述・表象しているかを究明している。一見社会科学の本の題名であるが、文学批評としての読解なのだ。‘Preface’の中で *The Other Victorians* では“bad text”を取り扱ったが、その“bad”の意味は対象とした文章素材の複雑さや曖昧さが書き手の「無意識・潜在意識」から来ていることの意味で、*Engels* では“good text”を扱っているのであって、その複雑・曖昧さが「意識的な意図」の結果なのだと、ポルノグラフィーとエン

ゲルスの著作の差異を説明している。

先ず第一章で産業革命の経緯を記述し、人口の数字等を実証的に挙げ歴史的な論述をする。第二章で、その中から生まれた工業都市マンチェスターは人類がそれまでに体験したことの無い異常な事態を現出させたという。そして当時の人々が、それをどう記述したかを丁寧に追究し、文学者を含む多くの人々が紋切り型の文章から抜け出そうとした苦闘の跡を提示している。第三章では、マンチェスターに滞在したエンゲルスを誕生から1845年まで伝記的に追い、父と息子の葛藤が、富裕な企業経営者の父から年金を受ける息子、フリードリッヒ・エンゲルスという革命家を生み出すまでを伝えてくれる。第四章、第五章では*The Condition of the Working Class*を詳細に論じて疑問と思われる英語への翻訳の上での部分では、ドイツ語原文をも載せて検討している。

実はマーカスは*Engels*の出版される前年に“Reading the Illegible”という論文を*The Victorian City* (Routledge & Kegan Paul, 1973)で発表した。この論文は*Engels*の第五章にほぼ相当するが、この論文の結びの言葉は“[He[Engels] read the city well(272)]”で終わっている。エンゲルスはマンチェスターという難解で判読しがたい(unintelligible and illegible)都市を、マーカスの言葉で言えば“a coherent system of signs (257, *Engels* 98)”として見事に読んだと、「都市を読む」即ち「都市がテキスト」になりうることを示している。さらに、窮乏した都市生活者の状態に関するエンゲルスのマンチェスターの表象について、“For anything that stands with it[this representation] or surpasses it one has to go to the later Dickens, to *Bleak House*, *Hard Times*, *Little Dorrit*, and *Our Mutual Friend* (272, *Engels* 198)”とディケンズの後期の作品群を評価している。マーカスは一貫して描写・表現の点からカーライルやギヤスケルのことも忘れていない。

労働者の生活の惨状に関連してマーカスは歴史的パースペクティブの点からこうも述べている。“And of course the twentieth century has been prodigal in the creation of such mind-stunning spectacles, mass events of such inhuman extremity that the only response to them is no response(270, *Engels* 192-3)”とマーカスは20世紀にも触れつつ、さらに、彼は注をつけて、“The literature on this subject is enormous. One may, however, point to the work of Robert J. Lifton, who has made a special study of responses to extremity. See in particular *Death in Life* (New York, 1967). (276, *Engels* 193 note)”と「原爆」の描写にまで目が届いている。ちなみにリフトンはGreg Mitchellと共著の形で後に*Hiroshima in America: A Half Century of Denial*(1995: New York; Avon Books, 1996)を出版している。こうした目配りと歴史的スタンスの幅、そしてフロイトの精神分析的解釈が何よりもマーカスの「読み」の特徴な

のだ。

先ほど8年後にと書いたが、1966年から1974年の間に批評理論の変貌が起こりアメリカではその実践の波が起こっている。彼の手堅い実証性に揺るぎはないのであるが、彼もその影響を受けて、言葉に少し変化が見られる。ここにマーカスの批評の方法に何らかの変化のあった事が推察されるのである。

エンゲルスが大学での教育を受けなかった事について一族に残る二つの言説とエンゲルスの伝記作家の解釈を巡って、“This episode bears every sign of being overdetermined, as the multiplicity of interpretations in the original sources themselves almost unmistakably suggests(70)”とマーカスは*Engels*では書いている。ここには多元性、多義性をあらゆるサインないし言葉に見とめるマーカスがいる。もともと弁証法は、当然のこのように、ある事象の中に逆説ないし矛盾を認識する方法論を包摂していると言い得るのだが、脱構築批評の影響が彼の文学批評における「語彙」、「文体」レベルでのテキスト分析の手法の内に起こっていると私には認識される。*Engels*からももう一つ例をあげておく。

エンゲルスが1842年11月に英国にくる以前に書かれた *Nicholas Nickleby* (1839年完結)の後半43章で突然ドイツから戻ってきて物語に登場する Cheeryble 兄弟の甥 Frank Cheeryble について、マーカスは、“What we have in Frank Cheeryble is a disinfected preview (with reverse English on it) of the career of the young Friedrich Engels. Dickens knew enough about the German-derived and -directed commercial community in Manchester to grasp in passing at the representative significance of such a figure. But the point of this note is not to introduce one more tedious discussion of how art anticipates nature. Dickens could imaginatively invent or re-create the outward shape of such a life, but it is also true that he could not imagine an Engels himself (252)”と説明する。

“Preview”の中に“review”を重ねて提示する「脱構築」の手法 (with reverse English on it) を用いながら、その手法でなければ説明のつかない時間の経過の逆転を行なって見せて、なお注意深く「エンゲルスのような人を作家は想像していたのではない」と説明をつけてマーカスは論を完結させている。またこの著作の中で一貫して Engels ないし Friedrich Engels と呼んでいた人物を251頁でマーカスは Fred Engels と表記し、Fred と Frank の隣接性を読者に想起させる。この手法は、もう一つの名前の近似性を読者に喚起させる。それは Cheerybles (チェアリブル兄弟) cherubs angels Engels の連想である。マーカスはこのように明示して記述していないが *Dickens: From Pickwick to Dombey* の中で Cheeryble の cherub としての属性は指摘している(112)。マーカスは書かないでこうした行間の「テキ

スト」を我々に想起させているのだ。

結語

マーカスの批評は、変化していく批評，成長していく批評，と言ってよからう。Dickens: *From Pickwick to Dombey* を書き表した，マーカスの批評の立場は，自己増殖的に成長を続けて，昔の1965年時点の記述法に従った同じ観点から，幻のDickens: *From David to Our Mutual Friend* は書くことが出来ないでいると現状を表現できよう。それがアメリカの「批評理論」の宿命かもしれないが，常に新しい文学批評理論に対応し得る幅広さが彼の批評の根底にあり，マーカスがこれからDickens: *From David to Our Mutual Friend* を出版するとすれば，彼はDickens: *From Pickwick to Dombey* の改訂版を先ず出さなければならないとも言えるのである。改訂版が出なくてもスタイルの差となるであろう。

他方で，彼は常に，文学作品であろうと社会科学的文書であろうと，「書かれた文章」において必ず‘intention’を問題とし，常に書き手によって描こうとしたことがどう概念化され，どのような言葉・語彙によって表象されたかという言語分析への鋭い興味を失っていない。それを，批評の中で表現する時の，彼の言葉と方法が時代の批評概念の変化と共に変化しているのである。ヒリス・ミラーの場合は，批評理論の実践を文学作品の中だけで行なって，高度に抽象化された概念を，よりの確に表象する言語を模索する方向で展開を，時には方向転換を続け，妖しいほど魅惑的な言葉の力を発揮している。これに対して，マーカスは歴史の実証性をその中に取りこみつつ批評理論の深化を目指している。この点では私はミシェル・フーコー(Michel Foucault)との近似性をマーカスに感じている。このときフーコーの名で私が思い描いているのは *Naissance de la clinique*, PUF, 1963 (『臨床医学の誕生』神谷美恵子訳，みすず書房)等の著作である。マーカスの特徴は，フロイトの精神分析的解釈に通暁している事と併せて，このバランスの取れた歴史軸の中に考察対象となる文学作品なりあるいは社会的存在の文書をも含めて考察する点にあるといえる。基軸は文学批評にあるのだが。

したがって，どのような展開が起ころうとも，Dickens: *From Pickwick to Dombey*(1965)で見せた彼の文学テキストに対する，単語のレベルから文体のレベルに至る，深い読みの的確さは文学批評の著作，幻のDickens: *From David to Our Mutual Friend*の中に通底しているであろう。

古い言葉ではあるが，それでこの論考を締め括るなら，スティーヴン・マーカスは文学作品そして文字表現に依存する文書の「読み巧者」である。